

令和 4 年 6 月 23 日現在

機関番号：37111

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K02633

研究課題名(和文)ドイツ汎愛派の教育改革 - 「知」の社会的機能と「人間の使命」

研究課題名(英文) Reform pedagogy of the German philanthropists. The social function of "Knowledge" and the "Vocation of Man"

研究代表者

田口 武史 (Taguchi, Takefumi)

福岡大学・人文学部・教授

研究者番号：70548833

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：ドイツ汎愛派による教育改革が持つ意味を、18 - 19世紀転換期の思想と社会をふまえて検討した。汎愛派は、自然な発育と実務的市民の育成という、矛盾を孕む二つの教育方針を提唱した。すなわち彼らは、個人の自律性と公共心の両立を目指したのであるが、その根底には、人間は社会的に有用な知性と身体を「自然」に獲得できるはずだという想定が指摘される。功利主義と目的論に基づくこの人間観は、ゲーツムーツが汎愛学校で開発した体育教育に、最も明確に表れている。彼の体育は、古代ギリシアの全人教育を復活させたものであるとともに、国家社会の規範に即した心身の自己統御を、近代市民の倫理的使命として定位する働きをした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究はドイツ汎愛派の教育思想を、近代市民が求めた新しい人間像・社会観の発現として解釈した。汎愛派は、家庭教育を前提とするロックやルソーの教育理念を、初めて学校教育として実践したのであるが、とりわけゲーツムーツによる体育の教科化は、思想史の観点で重大な意味を持つ。身体活動をカリキュラムに組み込むことで、知性による心身の自己統御を促すとともに、それを公教育が指導すべき社会的行為としたからである。汎愛派は学習の内容と成果を、有用性を指標として評価した。近代市民の価値観を如実に反映した教育方針であるが、有用性の判断が政治状況に大きく左右された歴史に鑑みると、その妥当性を慎重に見極める必要がある。

研究成果の概要(英文)：This research examined the significance of the German philanthropists' reform pedagogy for mentality and society at the turn of the 18th to the 19th century. The philanthropists advocated two seemingly opposing principles: The natural development of children and the education of citizens to be a useful contributor to society. In other words, they sought to harmonize individual autonomy and devotion to public collectivity. The core foundation of this goal however roots in the ideological assumption that the socially beneficial mind-set and body come "natural" to the individual. This view of humanity, based on utilitarianism and teleology, is most evidently realized in the physical education curriculum developed by J.C.F. GutsMuths. His "Gymnastik" was a revival of the ancient Greek education concept. It also intended to promotion of mental and physical self-discipline to act in accordance with political and social norms as an ethical responsibility of the modern citizen.

研究分野：ドイツ文化学

キーワード：汎愛派 教育思想 啓蒙 体育 身体論 市民社会 コスモポリタニズム パトリオティズム

1. 研究開始当初の背景

報告者はこれまで、R.Z.ベッカーによる「民衆啓蒙運動 (Volksaufklärung)」、すなわち 18 世紀末ドイツの成人農民に対する啓蒙活動を、中心的な研究対象としてきた。これをロマン主義の民衆文学志向と関連付けつつ考察した成果を、著書『R.Z.ベッカーの民衆啓蒙運動 近代的 Volk 像の源流』(2014)にまとめたのであるが、その際、ベッカーと共に啓蒙思想の一般普及に努めた「汎愛派」の啓蒙家たちについては、その重要性を認識しながらも、正面から論ずるに至らなかった。そのため本研究では、汎愛派を考察対象として取り上げることとした。

汎愛派はこれまで主として教育学の分野で研究されてきた。とりわけバーゼドゥやカンペ、ザルツマンらデッサウ汎愛学校に参加した教育家たちに関しては、それぞれ詳細な伝記的・思想的な研究が行われ、モノグラフが蓄積されているものの、依然、次の二つの課題が残されている。

【課題 1】汎愛派の言説に対する批判的考察が十分ではない。先行研究はしばしば、事実や言説の列挙で汎愛主義の展開を直線的に描き出している。しかし、教育改革および新しい教育観の啓蒙活動に際し、理論・理想と実践の間に、少なからず軋轢や妥協、軌道修正があったはずである。これらを丁寧に拾い上げることで、汎愛派の実相をより客観的に把握すべきである。

【課題 2】共時的視点(副次的文献、周辺領域への目配り)が十分ではない。汎愛派の人々は互いに、そして同時代の知識人たちと意見交換しつつ理論を構築し、実践に反映させていた。ゆえに各教育家の主張を取り上げるだけでなく、議論の広がり全体を視野に収め、世論としての汎愛主義が形成される過程を跡づけるべきである。また汎愛派の教育家たちは、学校での教育実践や広報活動といったアクチュアルな活動を特徴としているのであるから、当時の教育界・言論界の動向や社会背景をふまえて、彼らの言説を理解しなければならない。

2. 研究の目的

18 世紀後半のドイツで教育改革を推進した「汎愛派」の思想を、近代において「知」の社会的機能と「人間の使命」に対する考え方が変化してゆく過程において捉え直し、その歴史的意義を従来の教育思想史研究を基盤にしつつ、より複層的な視点から新たに提示することを本研究の目的とする。

具体的には(1)汎愛派の言説を詳細に分析・比較し、その保革両面の性格を指摘する。その際、核となる 4 概念、すなわち 自然、 実用・実利、 コスモポリタニズム、 パトリオティズム の相関性に焦点を合わせる。(2)汎愛派がプロイセン/ドイツの世論および公教育政策に与えた実際的影響を測る。(3)敬虔主義、啓蒙主義、シュトゥルム・ウント・ドラング、新人文主義、ロマン主義等との接点を探ることで、18 世紀後半から 19 世紀前半における諸思想の布置のなかで汎愛派の意義を明らかにする。

3. 研究の方法

上記二つの課題を念頭に置き、関連する教育家・思想家による著作の分析を積み重ねてゆくことで、汎愛主義研究を精緻化、深化させる。

【課題 1】に関しては、 自然、 実用・実利、 コスモポリタニズム、 パトリオティズム の 4 概念を指標として、対象文献を分析する。この 4 概念は、さしあたり右図のように示すことができよう。対象とする教育家および著作が、この座標平面のどこに位置付けられるか、あるいはどの方向へと変化したかを問うことになる。



汎愛派は新しい教育に、人間としての 自然 な発育と市民的な 実用・実利 の両方を求めた。しかしこの二つの要請は両立しがたく、それどころかルソーや M.メンデルスゾーンが指摘するところによれば、むしろ互いに阻害しあう関係にある。

また彼らは、 コスモポリタニズム と パトリオティズム という 決して対義語ではないにせよ そりの合わない二種類のエートスを調停しようと試みた。本研究は、これら二重の矛盾を解消しようとする言説に注目する。そこにこそ、各人の教育指針とその根底にある社会観、人間像が現れ出てくると想定されるからである。

もっとも実際は、 自然 と 実用・実利、 コスモポリタニズム と パトリオティズム がはじめから二律背反として捉えられていない事例も十分予測される。そのような対立構図が強く意識されるようになったのは、ロマン主義以降の時代である可能性も高い。論理破綻や理論と実践との乖離に着目する本研究がより重視するのは、したがって、この単純な指標では把握しがたい、矛盾を含む言行である。最終的には、ここに提示した概念対立自体を批判的に検証し、4 概念が混然一体となったものとして、汎愛派の思想を把握することを目指す。

【課題 2】に関しては、書評誌や新聞を中心に汎愛主義を巡る発言を幅広く集め、議論の流れを丁寧に辿ることで、汎愛派が同時代に与えた影響の大きさを測る。また汎愛主義の変遷については二次文献を渉猟するとともに、現在まで存続するシュネップフェンタール汎愛学校(現学校

名は「ザルツマン・シューレ」)の史料を用いて実証的に考察を進める。さらに同時代に強い関心を集めた「人間の使命」(元来は、プロテスタント神学と道徳哲学の関係を論じた J.J.シュバルディングの著作名)を巡る議論を補助線とし、啓蒙主義全体における汎愛派の役割を検証する。また新しい教育理念や教育における国家社会の役割をテーマとする同時代の文学作品・論考と比較することで、いわゆるゲーテ時代の文学・思想潮流における汎愛派の立場を明らかにする。

4. 研究成果

本研究の予備考察として、ヘルダーおよび J.ゲレスの神話論を対象に、彼らの パトリオティズム を検討した。同時代人ではあるが、汎愛派との関連が薄い両者をあえて取り上げたのは、汎愛派の政治的志向をロマン主義のそれと照らし合わせて、明快なコントラストで浮かび上がらせるためである。また同じ目的から、汎愛派のカンペが同時期に発刊したドイツ語辞典における Volk/Nation 概念との比較も行った。

ヘルダーは小論「イドゥーナ、あるいは若返りのりんご」(1796)において、ドイツ文学は北欧神話にも目を向けることで、新たな活力を得ると主張した。この提案は、北欧神話ないしゲルマン神話がドイツで認知される重要な契機となったが、ヘルダー自身は、北欧神話とドイツ神話とを決して同一視していなかった。むしろドイツに固有な神話の不在が彼の前提であり、その代用となることを北欧神話に期待した。一方『アジア世界の神話史』(1810)を著したゲレスは、古代インドに発する多分に空想的な世界規模の文明史を描いた。その際彼は、古代アジアと 19 世紀ドイツとの遙かな懸隔を、反復する自然と、母性のイメージを多用しつつ結び付けた。そうすることで、キリスト教の父権的な創世記と人類史からは感じ取ることができない、歴史の有機連続性を示そうとしたのである。

両者が、神話をとおして洞察される(インド)ゲルマンという時空に着目したのは、そこにドイツ人の存在基盤を見出せると目したからである。それは、帝国と領邦の間を揺れ、行き先が定まらないドイツ人のパトリオティズムに、共通の方向性を指し示す試みであった。とはいえ、この二つの著作において、パトリオティズムに政治的単位としてのドイツ国家(Nation)という枠組みを設ける意図を読み取ることはできない。すなわち彼らにとってのパトリオティズムとは、統治機構たる国家とは無関係に、ドイツ人のアイデンティティを成立せしめる文化的・歴史的紐帯の希求であったと考えられる。

これに対し汎愛派は、市民階級の自律的な社会構築に不可欠な志操として、パトリオティズムを重視していた。彼らはしかし、フランス革命以降の政治的緊張が高まる中で、自分たちの作り上げようとしている社会を外圧から守るという義務感に促されて、急速にナショナリズムと同調するようになった。神話や民族の根源には全く冷淡であった汎愛派が、ヘルダーとゲレスよりもむしろ強くドイツ国家を意識した言論活動を繰り広げたのである。この展開をより深く理解するため、パトリオティズム および ナショナル・アイデンティティ を巡る思想史と、主たる理論(B.アンダーソン、A.ゲルナー、H.コーン、A.D.スミス等)を確認し、それを踏まえて汎愛派の政治的スタンスの検討に着手した。

汎愛派が理想としたのは、自立した個人としての市民が共存共栄する社会である。この理想は、彼らの自覚するところによると、コスモポリタニズムに根差していた。しかし 19 世紀に入ると、多くが掌を反すようにナショナリズム志向を露にした。それはなぜか。なぜそのような転換ができたのか。観察・実習・実践を旨とする汎愛派は、工作や栽培などの職業体験をとおして、身体感覚をもって社会を理解し、実務で社会に貢献する姿勢を子どもに植え付けようとしてきた。アンダーソンが主張するように、国民という理念が視覚メディアによって想像可能となったとするならば、この身体感覚による社会把握という汎愛派の教育手法は、市民階級における国民意識醸成と深く関連していたに違いない。自立した市民は「役に立つ心身」を持たねばならないという倫理観は、これを発揮する場が非政治的な市民社会(Gesellschaft)から、ドイツ国家という政治的共同体(Gemeinschaft)に代わろうとも、同じように献身を促す働きをしたと考えられる。ナポレオンの侵攻に対する防御反応として、彼らのナショナル・アイデンティティが否応なく呼び覚まされたとき、汎愛派はそれまでのコスモポリタンとしての自意識を本質的に変えることなく、啓蒙精神の守護者を標榜しながら、しかし同時に祖国愛/愛郷心という動機を前面に押し出して、国民教育を推進することとなったのである。

次の段階では、当初、シュバルディング、メンデルスゾーン、フィヒテらの「人間の使命」に関する諸見解の検討、さらにザルツマンの著作およびトラップによるジャーナリズム活動を対象として、汎愛派の政治傾向と国民教育に関わる教育方針の絡み合いを探ることを計画していた。しかし上記の予備的・付帯的考察において、汎愛派の思想的特性 自然 志向と 実用・実利 志向のジレンマ、コスモポリタニズム と パトリオティズム の並立状態 を理解するうえで、「身体」という観点がきわめて有効であることに気づき、研究対象を J.C.F.グーツムーツ(1759-1839)の開発した体育(Gymnastik)に絞ることとした。

「最後の汎愛派」と称される教育家グーツムーツは、ザルツマンが率いるシュネップフェンタール汎愛学校において器械体操や水泳などの身体運動を教授し、これを理論と方法を兼ね備えた一つの教科として確立した人物である。体操の父 F.L.ヤーンは、グーツムーツの汎愛体育を

見学し、これを応用する形で自身の「トゥルネン (Turnen)」を構築したのであるから、グーツムーツこそがドイツにおける体育教育の祖であると言って差し支えないであろう。その業績については、体育学の分野における数々の優れた研究において詳しく紹介され、また高く評価されている。本研究ではしかし、それらの研究成果を踏まえた上で、グーツムーツの著『青少年の体育』(1793)を、教育思想書として読みなおした。これまでの体育(史)研究では重視されてこなかった点、すなわち新旧論争、啓蒙、文明、有用性、市民社会、国民国家、個人といったテーマに光を当てた結果、古代ギリシアの身体観と近代市民の倫理観とのアナロジー、古代ゲルマンに対するアンビバレントな姿勢、政治文化としてのオリンピズム、身体活動の機能別分類など、いくつかの注目すべき特徴が新たに浮かび上がってきた。

グーツムーツは当時の、とりわけ市民階層における過保護な育児や座学一辺倒の学習を問題視し、洗練された頭脳を持つ者こそ、頑強な身体を獲得せねばならないと主張している。その一方で身体活動の偏重に対しても、ゲルマン的「野蛮」への退化として警鐘を鳴らす。彼にとって体育とは、心身の調和的発達をもたらす教育であった。この体育観は、プラトンの『国家』における教育論を彷彿とさせる。事実グーツムーツは、プラトンと古代ギリシアの「ギムナスティケー」に多くを学んだのであるが、それを換骨奪胎した。すなわち彼は、卓越した精神が優れた身体を育むというプラトンの命題とは逆に、身体を鍛錬すれば強く快活な精神もまた自ずと育つと説いた。さらに 当時ほとんど忘れ去られていた 古代オリンピックを引き合いに出し、健全な身体に健全な精神という心身一如の状態は、公德心や愛国心の源泉となるがゆえに、体育は国家事業として推進すべき取り組みであると、彼は訴えた。

キリスト教化以降のヨーロッパでは、長らく身体軽視の時代が続いていた。娯楽や作法、軍事訓練としての身体活動はあったとしても、それらは公教育とは無関係の営みと認識されていた。ところが近代市民社会の新しい価値観を背景として、身体をとおした教育という発想が、自然に即した教授法として、また市民にふさわしい修養の手段として復活したのである。前述のとおり汎愛派は、人間本性に促された内発的な学びと市民的実務能力の養成という、二つの対立的教育方針を統合しうる論理と実践方法を探求した。その過程で、「自然」は社会に貢献しうる心身を人間に与えるという、目的論的自然観と功利主義に基づく教育論が形作られたのであるが、グーツムーツの汎愛体育は、この理念を具体化し、教育現場に広く浸透させる働きをした。

この点に注目すれば、近代的な体育教育が後進国ドイツで始まった理由が、次のように推察されるであろう。18世紀末のドイツにおける知識人たちは、イギリスやフランスにおける先進的な啓蒙思想を吸収しつつ、市民社会と国民国家の形成を模索していた。しかし一方で牢固な身分制社会の壁に阻まれ、他方でフランス革命という外圧にさらされたため、また台頭するロマン主義のラディカルな政治的志向に対抗するために、市民階級の立場で保守的で穏健な改革を継続する方途を必要とした。そこで身体という、身分にかかわらない普遍的原則を見出した。身体の鍛錬はすなわち精神の鍛錬である、健全な心身を持つ者こそ、個人の幸福と公共の福祉を共に実現できる、ゆえにそれは市民の倫理的使命である 体と心を繋ぎ、個人と社会を繋ぐ汎愛体育は、新しい国家社会を主体的に支える青少年の育成プログラムとして構想されたのである。

この道徳的で民主的な体育理念は、『青少年の体育』の翻訳をとおして、価値観を共有する周辺諸国の教育界へと瞬間に普及し、ヨーロッパにおける国民スポーツの一つの起点となった。およそ100年後に実現した近代オリンピックも、汎愛体育が生み出した動きの成果と見なされる。これは、汎愛体育が コスモポリタニズム に基づく思想であったことを証している。しかし汎愛体育は、スポーツを国威発揚の手段として政治的に利用する契機も作り出した。すでに19世紀初頭、グーツムーツ自身が愛国主義的姿勢を鮮明にした体育論を展開した事実を鑑みると、汎愛体育の理念中に強い パトリオティズム が存しており、それがナショナリズムへと転化したと推測することができよう。この点については、ヤーンのトゥルネン運動やフィヒテの政治的言説等も顧慮しつつ、今後より詳細に検討を進めてゆかねばならない。

上記の考察を補強するために、グーツムーツによる著作『身体と精神の鍛錬および保養のための遊戯』(1796)を検討した。彼は「遊戯 (Spiel)」にも有用性を見いだしていた。遊戯は身体運動の原点であり、また心身の養生や労働の点でも効果的だと考えたからである。彼の遊戯論は、体育論がそうであったように、種々の遊戯をその活動特性および教育上の効能に即して分類し、体系化したところに特徴がある。これは、看過されてきた遊戯の実用的価値を提示し、効果的な利用を促す試みであると同時に、目的のない、あるいは啓蒙的・市民的倫理観にそぐわない遊戯を排除するものでもあった。従来の遊戯研究は、同時代に美や自由、想像力の観点から遊戯を称揚したシラーやジャン・パウル、そして何よりホリスティックな教育の奥義として遊戯を推奨したフレーベルらの言説に注目してきた。しかしグーツムーツの『遊戯書』が数年のうちに何度も版を重ねたことが示唆するように、より教育現場に近い立場では、むしろ遊戯の社会的教化における効用への期待が強かったと考えられる。なお、期間中に十分な取り組みができなかった「研究の目的」(3)について、遊戯を鍵概念の一つとして考察を続ける予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 田口 武史	4. 巻 33
2. 論文標題 嶋田洋一郎訳『ヘルダー民謡集』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 九州ドイツ文学	6. 最初と最後の頁 79～81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15017/3053990	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 田口武史	4. 巻 3427
2. 論文標題 書評：須藤秀平著『視る民、読む民、裁く民』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 図書新聞	6. 最初と最後の頁 5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田口武史	4. 巻 30
2. 論文標題 書評 大野寿子編『グリム童話と表象文化 モチーフ・ジェンダー・ステレオタイプ』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 西日本ドイツ文学	6. 最初と最後の頁 33-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 田口武史
2. 発表標題 青少年 のための体育から 祖国 のための体育へ
3. 学会等名 日本独文学会中国四国支部第70回研究発表会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田口武史
2. 発表標題 「遊戯は大事な瑣事である」ーグーツムーツの遊戯論ー
3. 学会等名 日本独文学会西日本支部 第72回研究発表会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 田口武史
2. 発表標題 J. Ch. F. グーツムーツの身体論
3. 学会等名 第71回日本独文学会西日本支部学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田口武史
2. 発表標題 帝国パトリオティズムにおける祖国 (Vaterland) F. C. v. モーザーを中心に
3. 学会等名 九州大学独文学会第32回研究発表会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田口武史
2. 発表標題 ドイツ・ロマン派の神話研究 - “Nation” から “Volk” への推移を踏まえて -
3. 学会等名 神戸大学国際文化学研究推進センター 2017年度研究プロジェクト 「近現代における『神話』の史的展開と今日的意義」 第1回講演会 (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 田口武史
2. 発表標題 「イドゥーナのりんごを我らの手に！」 - インド・ゲルマン神話研究の発端
3. 学会等名 日本独文学会西日本支部第69回研究発表会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 植朗子、清川祥恵、南郷晃子編 上月翔太、里中俊介、野谷啓二、田口武史、大野順子、庄司大亮、横道誠、ホセ・ルイス・エスカロナ・ビクトリア、鋤柄史子、山下久夫、平藤喜久子、斎藤英喜、鈴木正崇、藤巻和宏	4. 発行年 2022年
2. 出版社 文学通信	5. 総ページ数 382
3. 書名 『人はなぜ神話 ミュトス を語るのか』（担当：「近代市民の身体をめぐる神話 J.C.F.グーツムツの「体育」におけるゲルマンとギリシア）」	

1. 著者名 酒井潔、鹿島徹、茂牧人、村井則夫、後藤正英、渡辺和典、川口茂雄編 田口武史	4. 発行年 2022年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 -
3. 書名 『啓蒙の百科事典』（担当項目「国民、民族主義、祖国愛」）	

1. 著者名 長尾伸一、小田部胤久、坂本貴志、武田将明、逸見龍生、岩佐愛、岩田美喜、上野大樹、大石和欣、大崎さやの、大野誠、大野芳材、隠岐さや香、川村文重、桑原俊介、小関武史、斉藤渉、坂下史、佐藤空、鳥山祐介、深貝保則、松原薫、若澤佑典編 田口武史	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 -
3. 書名 『ドイツ哲学・思想事典』（担当項目：「ゲレス」「クニッゲ」「ベッカー」「民衆啓蒙運動」「民衆・民族」）	

1. 著者名 植朗子、南郷晃子、清川祥恵編 横道誠、平藤喜久子、斎藤英喜、坂本貴志、山下久夫、田口武史、馬場綾香、潘寧、戸田靖久、藤巻和宏、大野順子、谷百合子、庄子大亮、谷本慎介	4. 発行年 2018年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 256
3. 書名 『「神話」を近現代に問う』（担当：「願わくは、この試みが広く世に認められんことを 十八 十九世紀転換期ドイツにおけるフォルク概念と北欧・アジア神話研究」）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------